エッセイ

仏教に生きること、生かされること

渡邊寶陽（わたなべ　ほうよう）

住職の月刊誌と銘打った『寺門興隆』という雑誌がある。ついに仏教寺院の周辺も社会に公開される時代になったのかと複雑な気持ちで眺めているのであるが、諸方面から寺院周辺についての再検討が試みられていて、興味深い記事もすくなくない。比較的最近の号の編集後記には、プロテスタントの牧師さん向けの季刊雑誌『牧会ジャーナル』の数年前の記事についての感想が述べられている。〈牧師の燃え尽きに関する読者アンケート〉という衝撃的な記事についてである。同誌で「あなたは牧師をやめたいと思ったことがありますか」という質問をしたところ、それに対して、「ある」という答がかなりの率であったというのには意外な感じを受けた。が、編集後記は「見ているうちに〈牧師〉というのが〈住職〉という文字に替って見えてくるから不思議だ」と記している。

宗教への批判的な言辞があたりまえという感じを持ってきたものだが、最近、前掲の雑誌のみならずさまざまな仏教雑誌にも結構、好意を寄せる記事に出会うことが多い。社会不安を増長させる事件を起こした集団に、ジャーナリズムは不気味さを感じ、いきおい宗教全般に不信感が漂っているのではないかと思う面もあるが、自分は信ずることはないけれども、宗教には関心を持つという感じの人もある。

文化人類学の上田紀行氏が『がんばれ仏教！』という本をＮＨＫ出版から出した。副題は「お寺ルネサンス時代」と記されている。上田氏がアメリカを訪れた際にインディアンの血をひく女性臨床心理学者の臨床指導を実験的に自ら受けた映像をＮＨＫ教育テレビで見たことがある。そういうスタンスからすれば、この本もいわば既成仏教の現場への巡礼紀行なのかも知れない。

評論家の呉智英氏は「私には全然宗教心がないし、これからも絶対にないと断言できる」というスタンスを語りながら、論語講読の塾生二人に出家を勧め、二人は僧侶になっていると語っている。呉氏は、いわば冷めた目で「僧侶には三つの側面がある」と断ずる。①には「仏教哲理を身につけた人」。②には「地域の文化センターとしてのお寺の主宰」をする人。③には「葬式屋」であるという。

③について呉氏はいう。「仏教を葬式宗教として蔑（さげす）む輩（やから）がいるが、大きなまちがいである。宗教の社会的機能としていろいろな儀礼を司（つかさど）ることは古今東西珍しくない。…人生の中で最大の節目が死である。それを宗教者が職業人として司って何が悪かろう。批判されるべきは、葬式屋としての職業倫理を欠いていることなのだ」（上記『寺門興隆』寺院・住職に直言・提言する